The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	携帯メールの世代差 ： 大阪中年層女性の携帯メールから
Author(s)	白坂, 千里
Citation	待兼山論叢. 日本学篇. 2013, 47, p. 57-70
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/54401
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

携帯メールの世代差

── 大阪中年層女性の携帯メールから ──

白 坂　千 里

キーワード：携帯メール／世代差／話しことば／書きことば

1. はじめに

本稿では、中年層女性が使用する携帯メールについて、以下の三点を述べる。

(i)　中年層女性は、若年層と同じように、普段の話しことば的表現や装飾的な表現を使用する。

(ii)　中年層女性は、若年層が使用する表現のうち、普段の話しことばで使用しないような表現や、逸脱的な表現は使用しない。

(iii)　中年層と若年層の間にみられる携帯メールの世代差は、若年層の携帯メールには「カジュアルなことばである」という性質が強く働いている一方で、中年層の携帯メールには「書きことばである」ということが根底にあるためだと考えられる。

日本では、携帯電話は1990年前後から一般にも普及し始め、2013年7月現在では、日本における携帯電話の契約数は1億3千台以上[1)]と、日本人口を上回る数になっている。現代において、もはや携帯電話は1人1台以上の時代となっている。そのような普及率の中、携帯電話を使用したコミュニケーション方法として、携帯メールが頻繁に利用されている。携帯メールは、携帯電話により確立された、新たなコミュニケーション形態である。電子メール自体は携帯電話が普及する以前から、パソコンを媒体として利用さ

れていた。しかし、パソコンを媒体として利用される電子メールと携帯メールとの間には、やりとりする目的や身体密着性など様々な部分により性質の違いがある。パソコンメールと携帯メールのちがいについては、太田（2001）や三宅（2005）が詳しい。

携帯メールの普及とともに、国内外を問わず言語学の分野では携帯メールの研究がさかんに行われるようになった。しかし、日本での携帯メール研究のほとんどは、首都圏の若年層を対象の中心としている。首都圏以外の若年層の携帯メールを調べたものには三宅（2006）、二階堂（2009）などがあるが、若年層以外の携帯メールについての研究はほとんどなく、その他の世代の携帯メールについてはほとんど明らかになっていない。若年層以外の世代でも携帯メールの利用はさかんである。今後若年層以外の携帯メールについての言語使用についても明らかにしていくことは、携帯メール研究のさらなる発展に必要であると思われる。そこで本稿では若年層以外の世代に焦点を当て、携帯メールの表現についてみていきたい。以下、2節で先行研究を概観したのち本研究の観点について述べ、3節で調査概要について提示する。4節で調査結果についてのべた後、5節で携帯メールの特徴的表現の世代差について考察を行い、最後に6節でまとめと今後の課題について述べる。

2. 先行研究と本研究の観点

本節ではまず、2.1で若年層の携帯メールに使用される特徴的表現を取り上げた三宅（2005）が挙げた特徴について述べ、その後2.2で本研究が採用する分析の枠組みについて提示する。

2.1 若年層にみられる携帯メールの特徴的表現

先述のように、携帯メールの研究は、首都圏の若年層を対象としたものがほとんどである。携帯メールの研究が発展しはじめてから、太田（2001）や笹原（2002）、三宅（2003）などで携帯メールの特徴的な表現が指摘され

てきた。今回はそれらの特徴を包括的に挙げた例として三宅（2005）を取り上げる。

三宅（2005）は、2004年に東洋大学の学生31名（女性22名、男性9名）から実際にやりとりした携帯メールを集め、分析している。31名が受信したメールもデータとして収集しており、そのメールの送信者も含めると調査対象者は全員で128名（女性72名、男性56名）となる。分析した結果、若年層の携帯メールにみられる談話的な特徴として「内容」「談話構成」「表現」「表記」を取り上げている。本稿ではそのうち、「表現」「表記」について見ていく。

まず、「話しことばらしさの表現」として、次の12項目が取り上げられている。以下、三宅（前掲）を一部改変して掲載する。

(a) 話しことばらしさの表現

①終助詞：特に、「ね」、「よ」のように、相手の反応を引き出す助詞が頻繁に使われている。

②助詞の省略：「が」「を」などの格助詞の省略が多い

③疑問文：疑問文で相手に質問したり確認要求をすることで、相手の応答が必要な構造が作り出されている

④感動詞、応答詞、あいづち的発話：「わあー」「ははは」「うん」など相手に反応する発話が多い

⑤擬音語、擬態語：「パンパンにしてやる」「鎖骨パキパキに折れて」など、生き生きした話しことばらしさを出している

⑥いいよどみ：「そ、それは…」「ご、ごめん」など、「話しことば」では実際にはあまり発話されないが、マンガなどではすでに確立されている表現を使って、驚きや困惑を表している

⑦若者ことば：「ってか俺が行ってもいいけど」「うざいよねえ」など、普段若者が使う口調を再現している

⑧縮約形：「おはぁ」「そだね！」「んじゃ」など、実際に話しているような口調・音調に近づけている

⑨古語：「かしこまった」（了解した、の意）、「よく寝てくだされ」など、実際あまり使わない表現をわざと使って、ふざけ半分の楽しさを出している

⑩方言：「予定入ってるねん」、「そうなんや」など方言を入れて、普段の自分を表現したり、反対に自分の方言ではない方言をわざと使っておかしさを作り出したりしている

⑪幼児語：「まだいるにょ？」「おやすみしまふー」など、幼児のような甘えた発音で柔らかさを表現している

⑫造語：「まぢんぐ？」（＝まじ？）、「おやすまぁ」（＝おやすみ）など、元のことばが分かる程度に崩した新たな造語

以上全て「話しことばらしさの表現」とはいっても、三宅自身も指摘するように、⑥⑨⑪⑫は話しことばらしい雰囲気づくりに貢献するものではあるが、話しことばではあまり発話されないような表現である。

次に、携帯メールの特徴的な表記について三宅（前掲）が取り上げたのは、以下の14項目である。以下、三宅（前掲）を一部改変して掲載する。

（b）表記

①絵文字：📷☀などのように、携帯電話会社ごとに提供されている特殊文字

②顔文字：「(＞_＜)」「(＾＾)」「m(_ _)m」など文字や記号を組み合わせて表情、動作を表現したもの

③記号：「☆」「♪」などのように、文字の中に記号として組み込まれているもの

④疑問符、感嘆符：「?」「!!」など、記号の一種だが、文法的な機能も担っているもの

⑤長音表記：「するよ～」「いいねえ～」など音調を表現するほかに、見た目も柔らかく見せる

⑥小文字：「ありがとぅ」「そぉね」「入ってるぅ」など、規範から逸脱した小文字のさまざまな使い方

⑦誤表記：「まぢきれたよ」「そぉよ」「聞こうぢゃないの」など故意に間違えた表記

⑧促音：「よしっ」「家いくからっ」などのように、わざわざ規範外の促音を入れて語気、音調を表す

⑨ローマ字・外国語：「GW」（ゴールデンウィーク）、「zzZ」（いびきを表す）、「BBQ」（バーベキュー）など、主に省略語として使う

⑩カタカナ：「リョーカイ」「スイマセンでした」「アノ人」など、故意にカタカナにする

⑪漢字：「それは全然可です」（まったく問題ないです、の意）などの一種の省略語だが、意味さえ分かれば読み方が分からなくてもよい

⑫ひらがな：「ふぇりぺいそがしそうだもんね」など、本来カタカナで書くもの（外来語、外国の固有名詞など）をわざわざひらがなで書く

⑬専門記号：「彼氏とイチャ②？？」（＝イチャイチャ？？）などのように、数学の記号など一般によく普及している専門記号を使う（ここではメールの文中で2乗を示す②を使用）

⑭句読点の省略：句末や文末には句点が省略され、その位置に絵記号や空白がおかれる

⑥小文字の例として、三宅（前掲）の中では他にも「ぉはあ」といった、文頭で小文字が使用される例も挙げられている。

2.2　本研究の枠組み

本研究では、2.1で述べた三宅（前掲）の指摘する若年層に見られる特徴が、若年層以外の年齢層でも使用されているかを見ていくことで、携帯メールの世代差について見ていきたい。

その前に、本稿では「話しことばらしさの表現」と「表記」をさらに以下のように分類する。

（a）話しことばらしさの表現

（a-1）普段の話しことば的表現

（a-2）（a-1）以外の話しことば的表現

（b）表記

（b-1）装飾的表現

（b-2）取替・逸脱的表現

詳しく述べると、まず（a）「話しことばらしさの表現」を、（a-1）「普段の話しことば的表現」と、（a-2）それ以外に分類する。（a-1）は文字通り普段の話しことば、つまり対面や電話などでの口頭によるやりとりで使用する表現で、（a-2）はそのような口頭のやりとりで使用しない表現である。なお、三宅（前掲）があげていた「方言」には母方言も母方言でない方言も含まれているため、本稿ではこれを区別する。

（b）「表記」は（b-1）装飾的表現と（b-2）取替・逸脱的表現に分類する。（b-1）は、もとある文章に何らかの装飾要素を加えた表現類である。一方（b-2）は、もともとある（規範的な）表現の一部・もしくは全部を削除し、その部分に他の文字や記号などを挿入した表現である。

それぞれに属す特徴を整理すると、以下表1のようになる。なお、表中の

表1　携帯メールに見られる特徴の分類

		特徴			特徴
（a）	（a-1）	①終助詞	（b）	（b-1）	①絵文字
		②助詞の省略			②顔文字
		③疑問文			③記号
		④感動詞・応答詞・あいづち的発話			④疑問符・感嘆符
					⑤長音表記
		⑤擬音語、擬態語			⑧促音
		⑩－Ⅰ母方言			⑭句読点の省略
	（a-2）	⑥いいよどみ		（b-2）	⑥小文字
		⑦若者ことば			⑦誤表記
		⑧縮約形			⑨ローマ字・外来語
		⑨古語			⑩カタカナ
		⑩－Ⅱ母方言以外の方言			⑪漢字
		⑪幼児語			⑫ひらがな
		⑫造語			⑬専門記号

囲い番号は、三宅（前掲）と対応させている。ここで注意したいのが、まず⑭句読点の省略が（a-1）に分類される点についてだが、句読点の省略は、三宅（前掲）も指摘するように、絵文字や記号類の使用と伴うことが多い。そのため、絵文字や記号類と同じ（a-1）に分類している。次に、⑦若者ことばなどが（a-2）に分類されているのは、本研究の調査対象者である中年層女性が、普段の話しことばで使用しないからである。

本稿はこれらの特徴のうち、中年層に使用される特徴的な表現とはどういったものかという分析を行い、携帯メールの世代差について考えたい。

3. 調査概要

先行研究で指摘されている携帯メールの特徴的表現が、非若年層の携帯メールにも使用されているかを見るため、非若年層の携帯メールの収集を行った。調査対象者は大阪府在住の、大阪府外に住んだことのない1957年生まれの女性Aである。中年層であるAが、日常生活の中でやり取りしたメールを2012年に4回にわたって計203件収集した。方法は、Aが所持している携帯電話のメール送信履歴の中からAが研究データとして使用しても構わないと判断したものを、調査者のPCに転送してもらった。この調査方法を採用したのはAの負担が少なく、なおかつ文章内に使用されている絵文字やデコメ絵文字[2)]を携帯の画面で見たままの形で保存できるからである。

4. 調査結果

分析の結果を、次頁の表2に示す。表2から分かるように、Aは、（a-1）（b-1）に属す特徴のほとんどを使用している。その一方で、（a-2）（b-2）に属す特徴のほとんどは使用されていない。つまり中年層のAは若年層と同じように、普段の話しことばでも使用する話しことば的表現や装飾的な表現は使用する。しかし、若年層が使用する、話しことばで使用しないような表現

や逸脱的な表現をAが使用することはほとんどない。

なお、ほとんどAが使用することのなかった（b-2）の中でも使用が見られた、⑧小文字についてみていくと、使用方法が若年層と少し異なる。以下の（1）～（3）は、実際にAが使用した携帯メールでの小文字の例である。[3)]

（1）よぉ知ってるわ。

（2）少し延びて 9月入ってからやなぁ。中頃になると思う。

（3）もう大丈夫そうやけどなぁ

以上のように、Aにみられた小文字の使用はいずれも長音を表現するのに使用されたものであった。しかし、若年層では三宅（2005）で述べられているような「ぉはよ」などの語頭での使用の他に、「今日ゎ」などのような、助詞「は」の代わりに小文字の「わ」を使用する例も確認されている。このような違いを考慮し、表中では小文字の使用を△にしている。

表2　中年層女性Aの使用する表現

		特徴				特徴	
(a)	(a-1)	①終助詞	○	(b)	(b-1)	①絵文字	○
		②助詞の省略	○			②顔文字	○
		③疑問文	○			③記号	○
		④感動詞・応答詞・	○			④疑問符・感嘆符	○
						⑤長音表記	○
		⑤擬音語、擬態語	○			⑧促音	−
		⑩－Ⅰ母方言	○			⑭句読点の省略	○
	(a-2)	⑥いいよどみ	−		(b-2)	⑥小文字	△
		⑦若者ことば	−			⑦誤表記	−
		⑧縮約形	△			⑨ローマ字・外来語	−
		⑨古語	−			⑩カタカナ	○
		⑩－Ⅱ母方言以外の方言	−			⑪漢字	−
		⑪幼児語	−			⑫ひらがな	−
		⑫造語	−			⑬専門記号	−

○：Aのメールにもみられた特徴　　−：Aのメールにない特徴

さらに、縮約形に関しても、Aの携帯メールに見られた縮約形は「ところ」

に対する「とこ」や「ている」に対する「てる」などで、三宅（2005）で挙げられたような縮約形とは性質が異なるように思われるため表中には△で示した。

以下、Aの携帯メールに見られた用例の一部を挙げていく。

（a）話しことばらしさの表現

（a-1）普段の話しことば的表現

（4）明後日よろしくね（①終助詞）

（5）昨日［同僚］ばかりで梅田グランドビルで集まったときまたまたるるぶもっていったよ。（②助詞の省略）

（6）大変やったね。大丈夫ですか？（③疑問文）

（7）え～!?主人が言ったのかな？（④感動詞など）

（8）今日はふたりともコロンやわzzz（⑤擬音語、擬態語）

（9）今日仕事やってんね。（⑩－Ⅰ母方言）

（b）表記

（b-1）装飾的表現

（10）私も買ったよ（①絵文字）

（11）＼(^o^)／（②顔文字）

（12）昨日メールありがとう[4]（③記号）

（13）何時ごろに行ったらいい？10時？（④疑問符、感嘆符）

（14）25日やった？24日っていってなかったっけ!?（④疑問符、感嘆符）

（15）了解です（だいたい着く時間見計らって行きますね（⑤長音表記）

（16）終わってまうよ～（⑤長音表記）

（17）虹がでてるよ_ベランダから見えるよ（⑭句読点の省略）

（b-2）取替・逸脱的表現

（18）よぉ知ってるわ。（⑥小文字）

（19）ホンマ痩せてるなぁ。（⑩カタカナ表記）

次節では、表2から明らかになった世代差について考察する。

5. 携帯メールの世代差

携帯メールは、文字で伝達される書きことばである。しかし新聞や書類といった典型的な書きことばと異なり、個人的なやりとりで使用される、フォーマル度の低いカジュアルなことばである。筆者は今回見られた若年層と中年層Aとの違いを、携帯メールが持つ書きことばとしての性質がどの程度働いているかの違いであると考える。つまり、若年層にとって携帯メールとは、「カジュアルなことばである」ということを根底としている。そのため携帯メールの表現には話しことば的な表現だけでなく、逸脱的な表現なども多用される。その一方で、中年層であるAにとって携帯メールは「書きことばである」ということが根底にあるため、規範意識が働き逸脱的な表現が使用されることはほとんどない。しかし新聞や書類といった典型的な書きことばとは異なる、「カジュアルなことばである」ということも意識されているため、話しことば的な表現や装飾的な表現を取り入れ携帯メールのカジュアル性を表現しているのである。

このような携帯メールの捉え方の世代差は、規範的な「書きことば」に触れた経験の長さと、携帯電話を所有した時期が関わっていると思われる。まず携帯メールを使用し始める段階について、若年層は、年齢的に早い段階（中高生の段階）から書きことばの主流に携帯メールがあった。この点に関して、インターネットメディア総合研究所編（2010）で2010年の調査結果から、携帯電話を使用し始める年齢を知ることができる。調査対象となった大学生のうち、携帯電話を初めて持ったのが12歳以下だというのは11.2％だったのに対し、高校生では12歳以下が約30％、中学生に至っては全員が携帯電話を12歳以下、つまり小学生の頃から所持していることが分かった。この結果から、携帯電話を初めて持つ年齢が年々低下している傾向が窺える。このように若年層は教室場面以外で「書きことば」を利用することのな

かった、いわば「書きことば」というものが個人の中で規範と結びつきながら確立し始める段階で、携帯メールを日常的に活用することとなったのである。だから、「文字で書かれた書きことばである」ということと、「規範」との結びつきは弱い。だからこそ、表記という制約もカジュアル性を表現する手段として利用し、（b-2）に属すような表現を楽しむのだと思われる。一方で、Aの利用する書きことばの中に携帯メールという手段が入ってきたのは、Aが既に文語性や公共性の高い書きことばに触れる経験（仕事場などで公的文書を読み書きする、新聞を読むなど）を多く積んだ後の段階であった。つまり、Aの中で規範意識と結びついた書きことばが確立した後の段階である。そのためAの携帯メールはカジュアルなことばであるという側面を持ちつつも、規範と結びついた「書きことば」ということが根底にある。そのような規範意識によって、若年層のように規範から逸脱した表現や、話しことばでも用いないような表現を用いるといった、携帯メール独特のことばを用いることがほとんどないのであろう。Aの携帯メールに文語性の高い言語形式が使用されている（白坂2013）ことからも、Aの携帯メールには、（規範と結びついた）「書きことばである」ということが根底にあると言えるであろう。

6. まとめと今後の課題

本稿で述べたことは、以下の三点にまとめられる。

（i） 中年層女性は、若年層と同じように、普段の話しことば的表現や装飾的な表現を使用する。

（ii） 中年層女性は、若年層が使用する表現のうち、普段の話しことばで使用しないような表現や、逸脱的な表現はほとんど使用しない。

（iii） 中年層と若年層の間にみられる携帯メールの世代差は、若年層の携帯メールには「カジュアルなことばである」という性質が強く働いている一方で、中年層の携帯メールには「書きことばである」ということが根底にあるためだと考えられる。

なお今回得られたデータは中年層女性1人から得られたデータであるため、どの程度個人差があるかという課題がある。さらに若年層に関しても、どの特徴を多用するかには個人差が存在する可能性がある。本稿で明らかになった世代差がどの程度一般化できるものか、今後の課題としたい。

［付記］

本稿は第11回都市言語研究国際セミナー於広島市文化交流会館での発表をもとに、加筆・修正したものである。発表の際にコメントをお寄せいただいた方々に記して感謝申し上げる。

［注］

1）　電気通信事業者協会（http://www.tca.or.jp/：2013年7月31日確認）参照。
2）　視覚的には絵文字と同じ大きさのgif形式の動画
3）　例文の表記において、下線部は該当箇所を示している。[ ] で囲んだ部分は、個人情報に関わる部分を伏せ、筆者による注を付け加えたもの。
4）　Aの記号の例と判断したものはほとんどデコメ絵文字であった。しかし、記号と形は同じものが使われていたため、本稿では記号類に分類する。

［参考文献］

太田一郎（2001）「パソコン・メールとケータイ・メール―「メールの型」からの分析―」『日本語学』20(9). 明治書院
笹原宏之（2002）「携帯メールにおける文字表記の特徴とその影響」『社会言語科学』5(1). 社会言語科学会
白坂千里（2013）「大阪中年層女性の携帯メールの言語的特徴―話しことばと対照して―」『社会言語科学会第31回大会発表論文集』
二階堂整（2009）「福岡の大学生の携帯メールにおける方言使用」『山口国文』32. 山口大学人文学部国語国文学会
三宅和子（2003）「対人配慮と言語表現―若者の携帯電話のメッセージ分析」『文学論叢』77. 東洋大学
――――（2005）「携帯メールの話しことばと書きことば―電子メディア時代のヴィ

ジュアル・コミュニケーション」『メディアとことば2　組み込まれるオーディエンス』ひつじ書房
――――（2006）「携帯メールに現れる方言―「親しさ志向」をキーワードに―」『日本語学』25(1). 明治書院
モバイル・コンテンツ・フォーラム監修、インプレスR&Bインターネットメディア総合研究所編（2010）『ケータイ白書2011』インプレスジャパン

（大学院博士後期課程学生）

SUMMARY

Generational Differences in Language Use in Text Messaging:
The Case of A Middle-aged Woman from Osaka

Chisato Shirasaka

In Japan, most studies examining language used in text messaging deal with young people in Tokyo. Therefore, the purpose of the current research is to look at the linguistic features used while text messaging by a middle-aged person outside of the Tokyo area.

This study focused on A, a 55-year-old woman from Osaka. Text messages were collected from A's daily life, comprising of those which she sent to friends, family, and colleagues. In total, the data amounted to 203 messages.

Results show that A often used expressions that are also commonly found in spoken language and decorative elements such as *emoji* or emoticons. On the other hand, A did not use expressions that are not commonly found in spoken language or that deviate from standard orthography very often, such as spellings unique to texting. In other words, A's texting was similar to young people in that she used decorative elements, but was dissimilar in that she did not use features which are not found in spoken language or deviational elements.

In conclusion, I suggest that differences between A and young people may result from different notions about the style of text messaging. Text messages have aspects of both written language and casual speech, and while previous research has shown that young people make a point of using casual speech as seen in the current study, when text messaging A is more aware of written language. As a result, A is not seen to use deviational forms and instead uses formal language (cf. Shirasaka (2013)).